

## 必要な教育と経験

NEA データバンク

須山賢也

[kenya.suyama@oecd-nea.org](mailto:kenya.suyama@oecd-nea.org)

---

### 1. はじめに

NEA データバンクに勤務して2年近く。管理職の端くれならば、未熟なこの自分に人様の能力や業績を判断するような能力があるのかと自問自答しつつも、スタッフの業績評価や離任したスタッフの補充をするための仕事もする。日本でもこういう仕事はおセンチな自分には向いていないと思っていたのに、まったく違う文化的バックグラウンドを持つ人を相手にしてこれを行うのは非常にシンドイというのが正直な感想である。ただそのおかげで、国際機関における人事評価とか職員採用といった、通常の技術委員会に参加するだけでは知り得ない事も間近に見ることとなり、その経験は、一つの感想というか疑問を私に与えてくれた。

それは、我々日本人の受けている教育や得ている経験は果たして、この国際社会においても有効なのだろうか、ということである。

### 2. 豊かな国際経験を自然に得ている彼ら

こちらの職員の経歴を見ていると、ある国で生まれ育って基礎教育を受けたとしてもそこに留まることなく、学士として卒業した国、修士以降のアカデミックな学位を取得した国、そして職業を得て在住している国が異なっている場合があり、その過程で所謂国際経験を自然と豊富に身につけているように見受けられる。

EU という枠組みがある現在、欧州出身者にとっては欧州各国間の移動は隣町に行くようなものなのかもしれないし、原子力政策や教育機関の状況が各国で違うことも影響しているのだろうが、母国を離れて欧州域内の別の国で自分の興味のある分野の教育をうけ、さらに別の国の組織に所属して学位を取得することは自然なものとして認識されているようだ。

そのような経験を積んだ彼ら・彼女らは、タフであり、ロジカルであり、そして複数言語を駆使したコミュニケーション能力が高い。国際機関での勤務者の増加は我が国政府の永遠の課題となっているが、採用面接においてああいった人達と競争をするのは、とても厳しいことだと改めて実感する。

我々が決して技術的に劣っているわけではないし、技術的な議論を行う専門家会合等では、自分の凄さをアピールするようにペラペラと話す事には全く意味が無い。流暢ではなくても全体を俯瞰する建設的な態度のもとに問題点を整理して発言をすることが大切なことは明白であり、そういう人であるなら、その人の人間性や学術的な成果に基づく認知度と長期間にわたる専門家会合等への貢献によって、会議で何かを決める時に誰もが振り返って注目する大御所としてのポジションを次第に得るようになる。こういう立場を得た人は、我が国の核データ分野にも多数おられたはずだ。

しかし、少なくとも我々の世代まではやはり相対的に自己主張が控えめなこともあり、面接やプレゼンのような短時間でうまく自分を表現して主張しないとイケない場合には、どうしても分が無いように思えてしまう。

### 3. 自分に経験と能力があるのか

私自身は典型的な地方都市(都市と言えない?)である鳥取県の米子に生まれて育ち、仙台で学位を取り、その後、生業として研究をするために東海村に移り住んだ。仙台に行ったときは、「遠くに来たなあ、やっぱり仙台は寒いなあ」と思い、大学入学後の1、2年は、長期休暇の際に米子に帰省してから仙台駅に到着すると、やっぱりなんとなく余所に来たような気になったものだった。そして仙台での9年間を無事に過ごした後に東海村に来た時には、「仙台よりは田舎かな、地方によって人の気質も違うもんだな」なんて、地域による違いを感じはしたが、結局は同質性の高い日本国内で「ぬくぬくと」育っていたわけである。

もちろん、私が育った日本の同質性は良い特性とも言える。和を以て貴しとなす、とまでは言わなくても、時間をかけて議論し、お互いの相互理解を得ながら次第に組織としての結論に近づいていく、こういったアプローチは私の心根に近いものがあって素直にいいなと思うのだが、ここで勤務していると、言葉の問題だけでなく、自分を抑えて「こんなところで頑張っただけで喧嘩をしてもなあ」と、つい引いてしまったことが果たして自分やチームにとって良いことだったのかと強く感じる時があるのだ。

自分が大学に入った当時、自分が一番にやりたいと思っていた原子核工学の研究の入り口に立てたことを素直に喜び、また研究室に配属されて自分の研究テーマが決まった時はそのことが嬉しく、また、それを全力でやりきることが目標で、友人達と研究室に入り浸った。それはとても良い経験であったし、自分の研究成果は大したものではなかったかもしれないけれど、今でもあの時の経験は今の自分の背骨を形作ってくれた貴重な

ものであったと断言できる。それは、当時の研究を指向する若い世代の標準的なモデルでもあったのだろう。でも、今思えば同質な組織に守られた時間でもあったようにも思う。

また、旧原研に就職してからこれまでに OECD/NEA に 2 回の赴任、某省への出向、そして機構内での異なる研究センターへの異動など、数年毎に何かしらの変化があつて、原子力機構の研究系職員の割には異なる分野の経験を得た回数が多い方だと思う。それでも、NEA 赴任以外は日本国内での経験しか得ていないし、複数回の海外勤務経験は入っているが、NEA への 2 回目の赴任は、結局は毎年数回の出張で訪れている組織への再赴任である。確かに色々やってはいるけれど、他国の人に比べて豊かな経験だと胸を張って言えるのかと言え、甚だ心許ない。

これらを合わせて考えて、自分の教育や職業人としての経験がこれから国際社会との付き合いを深めていくという目的に対応するだけの豊かさがあると胸を張って言えるのかと、ここに来て感じているのである。そして、個人の特性なのかもしれないけれども、時には克服すべきことがあるのなら、歳を取ってからの背伸びではなく、やはり若い時の経験によって自然に学んでいく方が良いのではないかと思える。

#### 4. 原子力の将来のための人材育成

人間はどうしても簡単で安易な方向に流れてしまうが、あるレベルに達したいと願うのであれば、やはり 1 段高い目標を掲げ、それに自分の力で取り組む経験を繰り返すことが必須である。30 年、40 年前までは有効であった（と思いたい）人材育成のシステムが、他国の同様の世代の人と比べてどうなのかはよく考えておくべきなのではないかと、前章に書いた事を背景にして最近思い始めているのだ。

福島での事故の後、わが国の原子力の研究開発の先行きが不透明な中で、質の高い研究開発を高レベルで維持する事は大きな課題であり、それを支える優秀な若手研究者を育成する事は必須である。しかもチェルノブイリ原発事故以前とは異なり、原子力が多くの学生を自然に引きつける事が困難になった時代に、である。これはかなり難しい課題である。

優秀な学生を引きつけるかどうかはそれぞれの時代での流行に左右される要素もあるが、若い人を引きつけるためには活発な研究活動が行われていることが必須であるから、まずは現在の研究現場で研究者が生き生きと活動できる環境を確保することが大切である。研究のための人材は研究現場でしか育てることは出来ないからだ。しかし、あらゆる事が他国とのつながりを見失っては進まなくなり、国際と国内の区別が次第に無くなっていく時代であれば、高レベルな研究が出来るだけでなく、さまざまな文化的バックグラウンドをもつ同僚や友人との切磋琢磨を通じた豊富な経験を得ているタフな人材として育成することが、もう一つの大切な要素になると思う。

アジアの片隅にあるという地理的なハンデを抱える日本の高等教育関連機関に、欧州各国なみのことをいきなりやれと言うのは難しいのかもしれない。が、過去の成功体験とかシステムに固執しているだけでは、日本は世界のダイナミックな流れから置いていかれてしまうのではないかと、いや、もうすでに遅れだしているのではないかとさえ思う。それは、世界だけではなくアジアの中でも存在感が薄れてきていると言われている日本の課題だと思う。

もし、日本での教育や研究開発機関で与えられる経験を欧米並みに国際化する事が難しいのであれば、せめて欧州の同世代と同等のクオリティやレベルの研究教育環境を確保し、さらに海外に出て鍛える機会を今以上に与え、欧米の若者達が持つ「タフさ」を身につけることにつながる経験を国内を中心に活動していても得られるようにすべきである。NEAのような国際機関での活動をきっかけにしても良いし、その他にも様々なアプローチがあるのだろうが、柔軟な気持で物事を受け止めることが出来る時期に出来るだけ大きな刺激を与えるように、周りが仕掛けを作っていくべきだろう。

私の例で言えば、同質な組織に守られた大学時代と書いたが、それでも博士課程在籍時に指導していただいた先生の計らいで NEA の実施する燃焼計算結果の相互比較を実施する国際ベンチマークに参加し、そのベンチマーク参加者が集まる会議へ出席した事があった。初めての海外渡航がその計算結果を携えた米国オークリッジ訪問であったのだが、その時の経験や見聞きした事は未だに強く印象に残っている。これらの経験がその後の私の仕事の方向性や広がりにも影響を与えた事は間違い無い。今の時代なら、こういった経験を若手研究者に複数回積み重ねることで彼らの目を外に向けて開かせることは当時よりずっと安価に行うことが可能であろう。

さらに言えば、学生に対して単に外に出てこいというだけではなく、送り出す組織側も一歩も二歩も踏み込んで、研究者養成やそれに関連する組織の国際化に取り組むこともまた必須のように思われる。諸外国の大学院生や若手研究者による、学位取得を目指した我が国の高等教育機関や研究開発機関への長期滞在がもっと頻繁かつ自然に行われるようにもするべきであろう。これは様々な国からの優秀な研究者の獲得にも繋がり、当該組織の研究開発活性化にも資する。

日本の研究機関（特に原子力機構）にはどのくらいの外国籍の研究者がいるのだろうか。確かに日本の大学にはまだ多くのアジアの国から学生が留学生として来ていると思うけども、学生の出身国の多様化は果たされているのだろうか。共同研究の協定があって人的交流を進めると行っても日本から相手先を訪問することが多く、また日本に滞在する外国人研究者はあまり見かけない。原子力学会の年会などではアジア諸国からの留学生は見るけども、欧米出身の人ってどのくらいいたのかなと思えば、欧州の学生や研究者の向かう先として、どうして日本の大学や研究機関が選ばれないのだろうかと考えてしまう。

受け入れ側の国際化は研究者個人の国際化よりもずっと多くの困難にぶつかるだろう。個人の考えだけではどうにもならない、その組織の風土のようなものが見えない壁となることが容易に予想されるからだ。英語によるコミュニケーションが不安だとか言われそうだが、誰もが簡単に海外旅行に行ってそれなりに楽しんで帰る時代であり、その点はそれほど心配することはない。お互いに理解したいという気持であれば、同じ人間、互いに言いたいことを理解するものだからだ。それよりも、全く違う文化の下で育った人そのものを認めて組織として受け入れること、多様性や柔軟性を持った対応を組織として出来るかが受け入れ側に問われるだろう。これは、同調圧力の高い日本の組織では思った以上に困難なことであり、組織としての取り組みが問われることとなる。

## 5. まだチャンスはある

こういうことを議論すると、だから日本はだめなんだとか社会や教育のシステムを変えないといけないというような話になりがちけども、前向きに考え、もし何かの障壁があるのなら、それを少しでも緩和するアイデアから初めてはどうだろうか。

例えば大学や研究機関間の提携を進めて若手研究者の研究をもっと長期にわたって外国の連携機関で行えるようにする、スタッフ採用プロセスの多様化や研究系・事務系といった枠を越えた人事交流を推進し様々な異なる文化的バックグラウンドを持つスタッフと仕事をする機会を増やすこと、などが考えられる。

また国際機関との関係で言えば、NEA 等が主催する委員会への若手研究者の出席を単に増加させるだけではなく、出席する委員会の主要メンバーとして継続的かつ能動的に彼らが活動することを組織として支え、それによってその技術コミュニティにおいて確固たるポジションを得る機会にまでつなげることが出来れば良いと思う。これが出来れば、彼らの目を外に向けさせるだけではなく、その委員会での我が国のプレゼンスを維持し、それをベースとした新しい研究テーマの発見や国際協力の進展も期待できるだろう。

これらが可能なのは、日本に魅力と実力があって声をかけた時にパートナーとしたい相手に振り向いてもらえる可能性がある時だけである。日本の姿が世界の中でまだ見えている今であれば、チャンスがまだ残っている。

## 6. 終わりに

こういう事を考えられるのは、やはりこちらに来たメリット、ちょっと離れて日本を見ているからなのかもしれない。核データとは関係ないかもしれないが、最近地盤沈下と言われる日本の事で特に気になっていることであるので、この機会を使って書き留めたいと思った次第である。

なお、本稿をまとめるに際しては、IAEA 職員の大塚直彦さんと JAEA から OECD/NEA

に派遣されている小泉まどかさんの両氏との意見交換を行い、それによって考えが固まってきた部分が多い。その点を記して貴重なお時間を割いて下さった両氏に御礼を申し上げたい。また、この意見は個人によるもので、筆者の所属する団体を代表するものではないことも申し添えておく。

## 追伸

コロナウイルスの影響でOECDでも全スタッフが3月半ばから在宅勤務となりました。放っておくと外に出なくなってしまうそうなので、体調管理のため、毎朝40分から1時間は散歩をするようにしています。アパートがブローニュの森の南端に近いので、森の中にある湖（池）を目標に歩いているのですが、そこでは現在、8羽の白鳥の雛が密かに人気者となり、ジョギングしている人も立ち止まってスマホで写真を撮り、またサッと走り去って行きます。以下、なんということもない平凡な写真ですが、私も毎朝見る度にホッと一息、コロナ騒動が終わることと、彼等・彼女等の健やかな成長を願っています。



撮影 2020年5月30日